

夫を家でみとった女性(手前)の話を書く
高橋院長(奥左)と折口さん



最期は住み慣れた家で

日本尊厳死協会の支部長を務める折口医院(広島市中区)の高橋浩一院長(65)は、患者に人生の最終章を自分らしく過ごしてもらうため、在宅医療の可能性を発信してきた。年間約60人のいまわの際に立ち会う。その中の印象的な出会いと旅立ちを紹介する『在宅緩和ケア医が出会った『最期は自宅』30の逝き方』を光文社新書から出した。(衣川圭)

広島の在宅緩和ケア医

折口医院の高橋院長が著書

呼吸器の病気が専門だった高橋院長。広島県内の病院に勤めていたころは、多くの肺がんの患者の治療に当たる一方、「家に帰りたい」と言いながら病院で亡くなる人の死亡診断書を書くことも多かった。「自分が家に帰りたい人を診よう」と2008年、訪問診療とともに、がんなどの痛みに対応できる「緩和ケア」の看板を掲げ、義父のクリニックを継いだ。

著書では、家でみとった30の逝き方。折口さん「在宅緩和ケア医が出会った『最期は自宅』30の逝き方」



高橋院長が、在宅医療の特長として強調するのは家の持つ力だ。「他人からはごみ屋敷に見えても、住み慣れた環境がやっぱり落ち着く。夜、

人の患者を、本人が来院▽ケアマネジャーからの依頼▽病院からの依頼など、七つの出会いのケースに分けて紹介している。病院での入院が難しくなった終末期の高齢男性は、訪問看護ステーションの依頼で出会った。入院中は、錯乱に陥る「せん妄」になり、点滴を抜いて暴れたりした。だが、家に帰って、好きなプリンを食べると「よかった」と落ち着いた。訪問するスタッフには暴力を振るわず、風呂に入ってもらって喜んでいたり。

チームが並走 希望に寄り添う

よく眠れるようになることも多いんです。患者さんの病気をただでなく、その人の生活を診て、看護師やヘルパー、薬剤師たちのチームで、暮らしの質を高めていくのがやりがいという。医療機関で8割が亡くなっていた勤務医時代と比べると、終末期の過ごし方は少しずつ本人の意思が尊重されるようになり、在宅診療や在宅みとりの存在も知られてきた。一方で患者や家族だけでなく、医療関係者も「認知症になつたら施設に入るしかないじゃろう」「介護するもんがおらんけえ家では暮らせん」と思い込んでいるケースもまだまだある。

だからこの本を通じて、家で暮らしたいと言っている人です。あなたのチームが最期まであなたと家族に並走しますよ」と言いたい。自分の考えや希望を何度も家族に伝えてほしいと願っている。新書判208頁。924円。

「在宅みとり」17年から倍増

在宅患者訪問診療料の在宅看取り加算の算定患者数(6月審査分)
※厚生労働省「社会医療診療行為別統計」から



「在宅みとり」の件数が増えている。医師が訪問診療をして患者をみとった際の「看取り加算」(6月審査分)の患者数は2022年に1万4624人となり、17年から倍増した。特に新型コロナウイルスの流行が始まった20年以降、伸び率が大きくなった。折口医院の高橋院長は「新型コロナウイルスで病院の面会が制限され、患者は家族と会えなくなった。家族も家に連れて帰りたいと希望されるケースが増えた。状態が悪いから病院で」と「状態が悪いから家で」と価値観の変化が生み出されている」とみる。

延命治療せず自宅で過ごした男性 家と家族の力で穏やかに

2年前に84歳で亡くなった広島市中区の男性は2019年、健康診断をきっかけに肺がんと分かった。延命治療を受けず自然に逝きたいと、妻(82)と話し合っていたが、妻は折口医院を受診した。手術を受けず、自宅で過ごすという願いは、健康診

初診の日、高橋院長に「往診や家でのみとりに対応してほしい」と言われ、通院し始めた。当初は穏やかに暮らしていたが、22年春、おなかを下すようになって訪問診療に切り替えた。しばらく後、下痢で汚れた服を一人で着替えようと

を折り、救急搬送された。新型コロナウイルス禍で妻とも会えず、なせ病院にいくかも分からぬほど混乱したという。退院のとき、妻は看護師から「おむつ替えが大変ですよ」と聞かされた。だが、妻は「家に戻ったら絶対大丈夫」と思っていた。実際、家に戻るとお

しな言動は減った。トイレで用を足すようになり、おむつもいらなくなった。当初はベッドで食事をしていて、7月には食卓で誕生日を祝った。「食欲が出てきて元気になったんです」と妻。折口医院の訪問薬剤師の折口裕子さん(69)は「一家の持つ力、家族の力で」とうなずく。

その後は腰椎を圧迫骨折し男性は弱っていたが、妻は高橋院長と相談して男性の希望していた通り点滴をしないことにした。お盆過ぎ、遠方に住む男性のきょうだいが増えてくる。在宅チームの力を借りれば、自然死の希望がかなう」と信じている。

静かに息を引き取った。妻は「額のしわが深い人です。ただ、全然なくなっています。最期の時間は夫からのプレゼントだよ」と義妹と話したんですよ。一人暮らしとなった妻も延命治療せず、自宅で最期を迎えたいと望む。「一人だ」と寂しさを隠さず、施設に入りたいと言った。折口医院でそう漏らしたとき、薬剤師の折口さんはおうちで過ごせるよと言ってくれた。今は「在宅チームの力を借りれば、自然死の希望がかなう」と信じている。

アロエの美肌

その特別なアロエとは、昔ながらのなアロエの力と美肌を目指して老舗のア

70代高保

命の美容 古き良きアロエを重ねると、顔に不足な増える肌の全容に近づきたい。寄りで見られるのはそんな悩み多き女性に。ムなの古き良き植物アロエを使ったオールワン美容ジェル。こつ塗るだけで顔中に沁透るだけ。シミも丸くアサるという。「もだから」と諦めた肌でヤツヤになり、パツツの透明感が広がるとを集めている。